

# 教育研究業績書

2018年05月14日

所属：教育学科

資格：教授

氏名：山口 豊

研究分野	研究内容のキーワード
日本語学、国語科教育学、人権教育	言文一致、幕末・近代の語彙、『和英語林集成』、岸田吟香、ジョセフ彦
学位	最終学歴
教育学修士	兵庫教育大学大学院

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
1. 横濱新報もしほ草索引（第一帙）（第二篇）	2017年4月2018年2月	平成29年度卒業研究において演習を行なった『横濱新報もしほ草第』について末平、嶋谷の両君とともに総索引を作成し、基礎資料とした。
2. 夢野台アクティブラーニング研究2016	2017年3月	兵庫県立夢野台高等学校において行ったアクティブラーニング授業のまとめをおこない、巻頭言においてアクティブラーニングにおける「静・動・静」の大切さや一つの行為にこだわることのマイナス面を挙げて説明した。
3. 若者への心理支援の実践	2015年2月	単著である『ソウイウモノニワタシハナリタイ』（風詠社）を刊行し、学習や友人関係で悩む若者に人生の先輩として語り掛け、心理的側面からの支援を行なった。
<b>2 作成した教科書、教材</b>		
1. 地域における人権教育の推進をめざして	2006年3月	ライフステージに応じた参加体験型人権学習実践事例集であり、兵庫県人権教育推進委員会の作業部会委員として作成に関わった。
2. じんけんスキルブック	2001年2月	人権教育の指導事例について乳幼児期、少年期、青年期、成人期、高齢期それぞれに応じたものを紹介している。
3. 完全マスター古典文法	2000年1月	兵庫県人権・同和教育研究協議会発行 谷本、伊井、澤田、山口による共著 高等学校副読本として作成した。
4. 完全マスター古典文法 指導と研究	2000年1月	指導のポイントや用例の補充を示した。
5. 現代語再発見	1998年3月	高等学校副教材として作成した。
6. 理解教材の研究	1997年3月	中学校国語指導書として作成した
7. 新詳説国語便覧	1995年2月	高等学校副読本として作成した。
8. 兵庫県文学読本	1993年3月	高等学校副読本として作成した。
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
1. 兵庫県立夢野台高等学校	2015年4月2017年3月	校長
2. 兵庫県立松陽高等学校	2012年4月2015年3月	校長
3. 兵庫県立神出学園	2010年4月2012年3月	校長
4. 兵庫県立小野工業高等学校	2006年4月2009年3月	教頭
<b>4 その他</b>		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 資格、免許</b>		
1. 生涯学習インストラクター（2級）	1997年12月	
2. 中学校教諭専修免許状（国語）	1993年5月	
3. 高等学校教諭専修免許状（国語）	1993年5月	
<b>2 特許等</b>		
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
1. 全国学校図書館研究大会神戸大会運営委員長	2016年	
2. 兵庫県学校図書館協議会事務局長	2014年	
3. 兵庫県子ども読書フォーラム推進委員	2014年	
4. 近畿学校図書館夏季セミナー大会実行委員長	2014年	
<b>4 その他</b>		
1. 明石市学校園飼育動物の診療に係る委託事業研修会 講師	2017年8月8日	
2. 明石市学校園飼育動物の診療に係る委託事業研修会 講師	2017年8月3日	

研究業績等に関する事項

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
1. 海外新聞総索引	単	2017年8月	武蔵野書院	早稲田大学図書館資料叢刊2『ジョセフ彦 海外新聞』を底本に、明治維新直前の元治・慶應に刊行された新聞の単語の総索引である。当時は文語体で書かれているのであるが、いくつか口語的な表記も窺える。幕末・明治期の言語生活を知る上での基礎資料として活用できるものである。
2. ソウイウモノニワタシハナリタイ	単	2015年2月	風詠社	これまでの教員生活で出会った子供たちの中には、自分の在り方について誰にも打ち明けることができずに一人で悩みを抱え込み、心身ともに疲弊してしまっているものがある。詩人であり童話作家でもある宮沢賢治の「雨ニモ負ケズ」の詩を基調として孤独に悩む若者へのアドバイスとその対処法について、語り掛けるような口調の文体、視覚的にも柔らかい丸ゴシック文字で心を包み込むように執筆した教育書である。
3. 岸田吟香『呉淞日記』日本語総索引	単	2012年8月	武蔵野書院	『呉淞日記』の資料的価値を確かめるためには使用されている語彙についても調査が必要である。そこで漢文表記の部分以外の日本語表記の語について、自立語と付属語に分けて総索引化し、調査の便を図ったものである。また、用いられている表記もひらがな、カタカナ、漢字、ローマ字があり、使用言語も日本語、中国語、英語が使用されており、当時の言語を知るよい資料である。巻末には「『呉淞日記』から読み取れる岸田吟香像」という論考を付けた。
4. 岸田吟香『呉淞日記』影印と翻刻	単	2010年3月	武蔵野書院	近代画家岸田劉生の父である岸田吟香は慶應二年にヘボン式ローマ字で知られるJ・C・ヘボンと出会い、彼が作成していた『和英語林集成』の編纂に協力することとなる。上海での印刷作業に同行した吟香はそのときの生活を日記に書き残している。これが『呉淞日記』である。言文一致運動が起こる以前から彼は何物にもとらわれない反骨精神のままに言文一致で日記を記している。つまり言文一致の走りであるとも言える。『呉淞日記』は名前こそ知られていたが、現物は所在不明であった。それを山口が調査の結果、所在を明らかにするとともに影印の刊行を行い、影印に対応して翻刻作業を行ったものである。
5. 日本女性の史的分類 データベース稿	共	2007年3月	東京女子大学女性学研究所	中世の日本語史研究に性差という視点を取り入れ、女性の直筆遺文の収集と整理を行うべく、その第一段階として『日本女性人名辞典』（日本図書センター刊 1993）掲載女性7000人を対象に、生年を基準として西暦100年ごとに分け、さらに階層ごと（皇室関係者・貴族関係者・武士関係者・尼僧・文人・遊女等）に配列する作業を行い、編年体目録を作成、データベース化したものである。 （共著者）金子彰、野村貴郎、山口豊、中西涼子
6. 五十音引き漢和辞典	共	2004年2月	三省堂	現代日本語の表現としての漢字・漢語の説明など、日常の日本語を読み書きするためにも用いることのできる利便性に着目し、中国古典語としての字義だけでなく、むしろ現代日本語に用いられている字義・熟語に重点を置く一方、中国・韓国など現代の漢字文化圏における漢字使用との相違についても記述するなど、現代の日常における漢字の辞典として新たな視点から編集したものである。今までの漢和辞典からの脱却を図り、五十音配置にした画期的な漢和辞典である。山口は語釈を担当した。（編者）沖森卓也・三省堂編修所（執筆協力者）金子彰・川端芳子・木村一・佐々木勇・チヨヒ チョル・陳力衛・野村貴郎・服部隆・福田哲之・山口豊・山本真吾
7. 角川 全訳古語辞典	共	2002年10月	角川書店	主として、高等学校の古文学習を念頭において編集した全訳古語辞典である。収録項目数は31,000語で全訳古語辞典としては最大の語数である。用例として主要古典の名場面を徹底収録し、すべてに現代語を付した。山口は巻末付録の「文語要語解説」を執筆担当した。現在も高校生を主たる対象として販売中である。（編者）久保田淳・室伏信助・沖森卓也・鉄野昌弘・保坂博子・室城秀之（執筆協力者）山口豊ほか77名
8. 完全マスター古典文法 指導と研究	共	2000年1月	第一学習社	「完全マスター古典文法」を授業で使用する際の教員向け指導書である。「設定のねらい」「学習目標」を各章の冒頭に記し、それぞれ「指導上の留意点」「補足説明」「用例の補充」「語源」を記し、学習者の課題解決能力の育成を図るようにした。
9. 完全マスター古典文法	共	2000年1月	第一学習社	高校用の文法教科書である。解釈・読解上役立つ実用的な文法副教材として執筆・編集した。すべての項目について用例と出典、口語訳を付けた。用例は

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
10. 和英語林集成第三版 訳語総索引	単	1997年5月	武蔵野書院	「国語Ⅰ」教科書所収の教材から取り上げ、不足分についてのみ他の古文用例で補った。助動詞・助詞の意味立ては最新の研究成果を参考にして見直し、実際に古文を解釈するときに当てはめやすいよう意味の細分化を図った。巻末には「口語文法要覧」を付した。山口は助詞・敬語を執筆した。(共編者) 金子彰、野村貴郎、山口豊
11. 理解教材の研究	共	1997年3月	三省堂	明治19年に出版されたJ・C・ヘボン作『和英語林集成第三版』の「英和の部」には多くの新造語が記されていると言われている。この「英和の部」の語彙を索引化する事により、当時の言語事情を知ることができる。また、先に飛田良文氏らによって『和英語林集成初版』の総索引が刊行されており、初版発行後20年を経て出版されたこの第三版と比較をする事により、個別の単語の消長を知ることができるようになった。
12. 新詳説 国語便覧	共	1995年2月	東京書籍	中学校「現代文」の教科書教材について、指導する教師を対象とした学習指導書を共同執筆した。山口は、島崎藤村の『初恋』と夏目漱石の『我輩は猫である』について解説し、指導資料を示して、教材研究の一助とした。 (共編者) 中渕正堯、池田宏、井出一仁、黒崎良昭、小西淳夫、小山泰、新治功、瀬木士郎、牧戸章、松本邦夫、光武一成、山口豊
13. 兵庫県文学読本	共	1993年3月	第一学習社	山口は、近世の文学、百人一首語釈、文法事項について執筆担当した。特に近世文学においてはこれまでどの出版社も取り上げなかった「怪談物」について記載した。江戸文学と怪異は切り離せないものであることに注目させた。 (共著者) 中渕正堯、長谷川滋成、花田俊典、竹村信治、栗井光代、岩崎克朗、遠藤和子、黒崎良昭、小竹光夫、鈴木敏雄、野村貴郎、牧本千雅子、松本邦夫、光武一成、山口豊
14. 夢酔独言総索引	共	1992年10月	武蔵野書院	高校生や一般の人を対象として、兵庫県に関わりのある文学作品を現代文・古文・漢文分野でそれぞれ抜き出し、文学に親しむ副教材を共同で作成した。兵庫県の高校生に国語科の副読本として使用させた。山口は東播磨地域の執筆監督を担当した。 (共著者) 青木雅一、栗井光代、池田純人、石原元秀、内野健夫、北川真一郎、黒崎良昭、河野浩、坂本久刀、澤井真也、澤田英史、塩谷誠、清水誠朗、橋幸男、田中宏幸、中村忠生、野村貴郎、橋本正信、村中礼子、山口豊、山田朕
15. 柳髪新話浮世床総索引	共	1983年2月	武蔵野書院	幕末の話しことば資料として知られる勝小吉(勝海舟の実父)が著した自叙伝の総索引である。索引作成に当たっては直系子孫が保有する自筆本のコピーを入手し、それをもとに正確な索引作りに努めた。この作品には恣意的な仮名遣いや多彩な用字法も多く、江戸時代後期の下級武士のことばを探る基礎資料である。巻末に特徴をまとめた山口の論考「夢酔独言の国語資料的価値」、稲垣の「夢酔独言」小論を付載した。巻末には『日本の名著』本、『東洋文庫』との頁行数対照表を付した。 (共著者) 稲垣正幸、山口豊
<b>2 学位論文</b>				
1. 接辞についての研究	単	1992年12月	兵庫教育大学修士論文	山口の大学卒業論文「近世期の語彙研究」の資料編をベースに、指導教官であった稲垣正幸氏の指導のもと、全面改訂をして出版したものであり、『日本古典文学全集』所載の『浮世床』を底本とし、延べ35,600語の単語を自立語と付属語に分け、言語感覚に鋭敏であったと思われる三馬を通して、江戸後期町人ことばの基礎資料とした。なお、巻末に底本とした『日本古典文学全集』と『新潮に本古典集成』『日本古典全書』との頁行数対照表を付けて活用の幅を広げている。 (共著者) 稲垣正幸、山口豊
<b>3 学術論文</b>				
1. 『海外新聞』に見える幕末のことば 一口語文への兆しー	単	2018年3月	『教育学研究論集』第13号 武庫川女子大学	大学院での研究テーマとして文の成分である『接辞』について取り組み、修士論文としてまとめたものである。第1章で接辞の基本概念及び分類について触れ、第2章で江戸時代後期における実態として『浮世風呂』に見られる全用例をあげ、男女差・世代差・階層差などの観点から考察した。第3章では用言接頭辞をとりあげ、接辞はその使用背景が大きく関わることを明らかにした。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
2. 宮沢賢治作品の「王様」について －「双子の星」を中心に－	単	2018年2月	『学校教育センター年報』第3号 武庫川女子大学 学校教育センター	力者から制約を受けることがなかった素材を取り上げ、口語文としての兆しがどのような所に、どのような形で現れるのかということについて用例をあげて調査し、言文乖離の状況下で言文一致へと向かう様子について考察した。その結果、文法面では下二段活用の下一段化が、表記面では発音通りの表記が多く見られることを確認した。さらに外国語表記には一定性がなく、聞こえた通りの音をカタカナ表記しており、当時の人々がどのように聞こえていたのかを知る手掛かりとなることを指摘した。
3. 若松賤子「ありませんかった」考	単	2015年3月	兵庫県高等学校教育研究会国語部会『国語論叢』	宮沢賢治の初期童話作品である「双子の星」にはこの世のすべてを見通した「王様」の存在が描かれている。しかし、作中には姿を現さず、その存在が敬意をもって語られている。実体を伴わない「王」には賢治の中にある宗教への思いを感じとることができる。初期作品とは言え、賢治の童話を貫くものはすでに賢治の中にあっただと見るべきである。法華経をはじめいろいろな宗教を経験した賢治にとって、宇宙の中心となる存在を「王様」とするのは当然のことであり、本稿ではそれが「釈迦如来」であったという結論に達した。
4. 言文一致文体の課題	単	2014年8月	三省堂 『高校国語実践の省察と展望』	明治初期、小説家たちを中心に言文一致文体の試みがなされていく中で、定着しなかった表現もあった。その一つが若松賤子が『女学雑誌』に発表した文末が「ありませんかった」というものである。なぜそのような表現方法を取ったのか、またそれはなぜ定着しなかったのかということを中心に『小公子』の全文から用例を取り出し、その特徴を分析した。その結果「であります」の過去形としての表現形式は誤用であるという規範意識が働いたためによると結論付けた。東京女子大学での発表を基に加筆修正したものである。
5. 心学道話における口語要素について －文末文節の構成比較による試み－	単	2013年10月	武蔵野書院 近代語学会 『近代語研究』第17集	方言で書かれた「方言詩」や若者が発音どおりに表記して書く文章を題材に、「言文一致」と「描写」との違いを明らかにするとともに、混同しやすい「言文一致文体」と「言文一致」との関係江戸時代後期から明治時代初期の口語文献から考察したものである。また、滑稽本などに見られる会話文が、なぜ言文一致文体でないのかを地の文の文体で区別できることを確認した。高等学校の「国語表現」の授業に応用してもらおうことをねらいとしたものである。
6. 『海外新聞』に見られる字音語の割合	単	2012年3月	武蔵野書院 近代語学会 『近代語研究』第16集	『道二翁道話』、『松翁道話』、『鳩翁道話』という三つの道話について、文末文節の構成を比較し、各道話の口語要素の実態及び特色を探ろうと試みた。各初篇のみを調査の対象とし、それぞれの文末文節の構成を分類してパターン及びその百分率を一覧にし、それぞれの特色を探った。次に近代の回想録と演説速記を取り上げ、同じ規準での比較を試みた結果、心学道話は文末に助詞を効果的に使い、口語独特のやわらかさを醸し出したり、体言止めを用いて臨場感を出すなどの特徴が見られた。
7. 『呉淞日記』に見られる促音無表記語の実態	単	2011年3月	兵庫教育大学 『言語表現研究』27	『海外新聞』は発行日時により、初期・中期・後期に分類されるが、それぞれ使用された字音語（漢語）の比率によって、目指していた購買層を知る手がかりになると考えた。調査の結果、『海外新聞』は同時代の新聞としては字音語が少なく、話しことば的要素を多いことがわかった。これを平易な文章、わかりやすい文章を求めた結果自然と話しことばのようになっていったのかもしれないと推論付けた。
8. 『呉淞日記』の中の漢語	単	2011年3月	おうふう 坂詰力治先生古希記念論文集『言語変化の分析と理論』	『呉淞日記』は吟香が話したであろうと思われるそのままに表記がなされており、音便についても表記がなされている。促音『っ』も当然表記されているが、現代語では促音を用いて表現する『行く・往く』という語の促音便形の多くが『っ』の表記のない状態で登場する。その原因について吟香が言語習得期に居住した岡山地方の方言にも見られる促音脱落現象の反映ではないかとして論証した。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
9. 『呉淞日記』に見られる片仮名表記語について	単	2010年10月	武蔵野書院 『近代語研究』第15集	口語的要素の強い岸田吟香の『呉淞日記』に用いられた片仮名表記語をすべて取り上げ、16通りに分類した。現代では外国語表記や擬音語、計量の単位などに用いられている。また、発音や注釈を表わすのに片仮名を用いる事は日本では古くから行われていたことであり、漢学の素養のあった吟香にとっては身に染み付いていたことであっただろうが、古来の用法にとらわれず、自由に駆使して用いたところに吟香の言葉の息吹を感じることができる。
10. 『呉淞日記』に見られる言文一致の萌芽	単	2008年10月	武蔵野書院 『近代語研究』第14集	1866年に岸田吟香（当時33歳）がヘボンと一緒に『和英語林集成』印刷のために上海に渡航し、印刷、校訂に従事した時に記した日記で、全2912文中、770文（35%）が文語色が強く、1392文（64%）が口語の形態で記されている。日記という私的文章ではあり、地の文も多くは口語になっている。また、文末が文語調であっても文中の語彙は口語であったり、その逆も存在する文献である。改まった場面には文語を用いながらも地の文中の活用や言い回しに口語の要素が見え隠れする言文一致の波が迫っていた時代の文献である。
11. 江戸町人の会話における漢語使用の実態 — 『當世七癖上戸』の使用例から—	単	2006年12月	武蔵野書院 『近代語研究』第13集	式亭三馬の滑稽本であり、落語という話芸をイメージして執筆された作品であるので、話しことばの性格が強い作品である。西宮市立中央図書館蔵の版本を底本に、登場するすべての漢語を使用度数とともに挙げ、つぎに登場人物ごとに漢語の使用率を調査した。自立語数984語であり、うち漢語が251語と全体の25.5%という高い数値を得た。
12. 『人間萬事虚誕計』の文体比較	単	2004年3月	都留文科大学 『国文学論考』40	『人間萬事虚誕計』は、初編が式亭三馬、二編は瀧亭鯉丈という違った作者からなる。著作の形式は鯉丈が同じように書いているため一見わからないが、やはりどこか文体の違いを感じさせる。そこで、その違いがどこから来るのかを考察し、その一文の長さ、名詞と副詞の使用度、漢語の使用比率などが文体の違いを特色づけていることを明らかにした。
13. 近世後期上方語資料としての『鳩翁道話』について	単	2004年11月	武蔵野書院 『近代語研究』第12集	東京都立中央図書館蔵の版本（天保10年版）を底本に、江戸時代後期上方における言語の様相を探ることを目的とした。話し言葉文献、それも上方における資料は特に少なく、特殊な講義の中で用いられた表現形式であることを差し引いても貴重な資料であることを述べ、続いて一文の長さや指定の助動詞、音便・音訛、文末表現、使用された漢語について調査して、比較研究のための基礎資料を作成した。
14. 人間一心覗替換総索引	単	2002年12月	武蔵野書院 『近代語研究』第11集	『人間一心覗替換』は寛政六年、式亭三馬によって書かれた黄表紙本である。主人公である馬次郎が人の心が見えるという腹明鏡を用いて心の中の言葉を書き留めたという設定の作品である。この心の中の言葉は当時の人々の使用言語であったと思われる。本稿はこの作品に使用されたすべての語を索引化し、使用実態を探る基礎資料とした。
15. 天道浮世出星操総索引	単	1999年10月	武蔵野書院 『近代語研究』第10集	式亭三馬の処女作であるこの作品は、彼の本領を発揮する滑稽本につながる要素を多く含んだものであり、独特の言い回しや表現など当時の言語生活を知るための資料となる。また、この作品を通して当時の語彙の様子を知るための基礎資料を作成した。
16. 『和英語林集成第三版』のcollと注記された語の性格について — 地方語との関わりを中心に —	単	1998年3月	兵庫教育大学 『言語表現研究』14	『和英語林集成』には見出しに「coll」と注記された語が多く存在し、いわゆる「俗語」として扱われている。そこで、本稿ではこれらの語と方言である地方語との関わりについて調査をした。具体的には『俚言集覽』所収の語との一致率で判定している。この数値から「東京語」の成立を考えたとき、「下町ことば」や「俗語」「地方語」との融合が重要な位置を占めていることがわかった。
17. 江戸語における終助詞『え』『す』『て』 — 『人間萬事虚誕計』の用例を中心に—	単	1998年3月	兵庫県高等学校教育研究部会国語部会 『兵庫国漢』44	『人間萬事虚誕計』はさまざまな男女が登場し、それぞれ本音と建て前を述べるという趣向で書かれており、当時の町人のことばを知る手がかりとなる。この稿では『え』『す』『て』という特定の終助詞に焦点をあて、その使用法の違いについて言及した。章立ては、①資料及び作者について ②『人間萬事虚誕計』に見られる文末文節の種類について ③江戸語における終助詞『え』『す』『て』の意味・用法である。
18. 専修寺蔵『尊號眞像銘文』（広本）総索引稿	共	1997年5月	武蔵野書院 『鎌倉時代語研究』20	高田専修寺蔵本、親鸞聖人写の『尊號眞像銘文』（広本）に用いられているすべての語を索引化したものである。この経文には字音語に朱点がついており、当時の清濁を知る手がかりとなる。また、昭和63年には同じく親鸞写『尊號眞像銘文』（略本）の索引も公表されており、二つの相違を知る手がかりともなる。さらには使用された漢語から当時の庶民の漢語

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
19. 兵庫県揖保郡新宮町下笹方言の待遇表現	単	1997年12月	方言研究ゼミナール（広島大学）『方言資料叢刊』第7巻	受容の様子も推し量られる。（共著者）金子彰、野村貴郎、大野耕司、中川朋之、山口豊 会員が同一の質問項目に基づいて日本各地で同一の調査を行い、比較する試みである。山口は兵庫県揖保郡新宮町下笹方言を担当し、その地に見られる待遇表現についてレポートした。調査した地域においては人間関係に応じた待遇表現に多くのバリエーションがみられた。（共著者）藤原与一、神部宏泰、山口豊 他
20. ヘボンの漢字用法の一側面－『和英語林集成第三版』に見られるあて字の連想関係による分類を中心に－	単	1997年11月	兵庫県高等学校教育研究部会国語部会『西播国語』27	『和英語林集成第三版』の見出しに記された漢字は、いわゆるあて字が多く用いられている。そこで、あて字の用い方についての分類を行い、編纂者であるヘボンがどのような規範意識を持って辞書の編纂に当たったかを伺い知ることを目的とした。本稿では、あて字を12種類のパターンに分類した。その結果、見出し語の説明の一部や異相語として意識的なあて字を試みていたと結論付けている。
21. 近世後期の漢語受容について－『鳩翁道話』を中心に－	単	1996年3月	兵庫県高等学校教育研究部会国語部会『兵庫國漢』42	心学は幕末の上方において庶民に人気のあった学問であり、『鳩翁道話』は京都での講義を息子に書き取らせたもので、当時の言語資料となっている。江戸時代後期の町人たちの言語生活においてどの程度漢語が浸透していたかを知るための調査結果である。特にこの時代の上方の実態は明らかにされておらず、第一級の資料である。
22. 『和英語林集成第三版』における三字漢語の構造－現代語調査との比較を通して－	単	1996年3月	都留文科大学『国文学論考』32	国立国語研究所報告で現代の新聞に見られる三字漢語の構造の比率と明治19年ごろ使用されていた三字漢語の構造の比率にはどのような違いが見られるのかとすることについて調査したものである。その結果、明治期以降の三字漢語においては、それまであまり使用されなかった動作性・状態性を伴う名詞が多く造語・使用されていたことがわかった。
23. 教科別一文の長さの比較について	単	1996年11月	兵庫県高等学校教育研究部会国語部会『西播国語』26	一文の長さには個人差があるが、内容によって生まれる差はないのかということを中心にしようとしたものである。高等学校で使用されている11教科の教科書を用いて、平均自立語数や、平均の読点数など数項目にわたって調査した。この調査においては、『政経』『生物』など、説明が多い教科が一文が長くなっている。一文が長いと予想された国語においては小説・評論などのジャンルの違いや同じジャンルでも作家によってかなりの差が見られた。
24. 程度を表わす語についての一考察－「ばり」を中心に－	単	1994年3月	兵庫県高等学校教育研究部会国語部会『独創』第八号	程度の甚だしいことを表わす方言の一つに「ばり～」という程度副詞を用いたものがある。程度の甚だしさを伝えようとする意識は絶えず、新しい表現形式を求めている。本稿は明石市における実態についての調査報告である。
25. 終助詞『な』『ね』について－『浮世風呂』を中心に－	単	1994年11月	兵庫県高等学校教育研究部会国語部会『西播国語』24	終助詞『な』『ね』に共通した『同意を求める用法』に注目し、それぞれにおける精密な用法の違いを考察するため、さまざまな階層の登場する『浮世風呂』からその用例を取り出して考察した。その結果として母音三角形における音の広がりとそのイメージにより、『な』『ね』の性差、年齢差が形成されていくと結論付けた。
26. 接尾辞『めく』の消長	単	1993年3月	兵庫教育大学『言語表現研究』9	『はるめく』『きらめく』など、動詞転成接尾辞『めく』の造語力を中世以降の辞書（『日葡辞書』『和英語林集成第三版』『現代国語例解辞典』）から用例を抜き出し、擬声語・擬態語を語基とするものが減少していることを示すとともに現代においては『～ばい』『～くさい』などの語が『めく』の造語力の領分を代替するようになったなど、その造語力の減少について考察した。
27. 程度を表わす語について	単	1987年3月	兵庫県高等学校教育研究部会国語部会「独創」創刊号	現代語では「とても」と訳す古語の程度副詞「いと」「いたく」「いみじく」の三語について、その使い分けを下接する語の品詞及び被修飾語の位置関係について「枕草子」の用例を元に検討したものである。
<b>その他</b>				
<b>1. 学会ゲストスピーカー</b>				
<b>2. 学会発表</b>				
1. 若松賤子の「ありませんかった」考	単	2015年10月	東京女子大学 日本語史研究会	明治初期、言文一致文体の試みがなされていく中で、定着しなかった表現もあった。その一つが若松賤子が『女学雑誌』に発表した文末が「ありませんかった」というものである。なぜそのような表現方法を取ったのか、またそれはなぜ定着しなかったのかということを中心に『小公子』の全文から用例を取り出し、その特徴を分析した。その結果「でありま

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
2. 大新聞と小新聞の語彙 -郵便報知新聞と錦絵新聞の対比を通して-	単	2014年10月	東京女子大学 日本語史研究会	す」の過去形としての表現形式は誤用であるという規範意識が働いたためによると結論付けた。 明治初期から中期にかけて大新聞と呼ばれるものと小新聞と呼ばれる2種類の新聞が存在していたことがわかっている。本稿では使用語彙に違いがあるのか、どのような違いかを調査するため、採録出典が同じものを取り上げ、大新聞として郵便報知新聞、小新聞として錦絵新聞を例に使用語彙の比較を行なった。その結果、予想通り大新聞は漢語率が高く、文体も漢文調であり、小新聞は口語的要素が強いことがわかった。また、振り仮名のバリエーションは小新聞の方が多いことがわかった。
3. 明治初期「郵便報知新聞」における振り仮名について	単	2011年9月	東京女子大学 日本語史研究会	明治7年の「郵便報知新聞」の記事に用いられている振り仮名について具体例を挙げ、振り仮名の振り仮名遣いと本文の振り仮名遣いとは若干の違いが見られ、振り仮名の方が歴史的振り仮名遣いの縛りが緩かったことを論証した。また、今のように読みを示す働きだけではなく、意味を表す働きをしたり、イメージを与える働きをしたりする役割を担っており、読者の語彙を豊かにし、読みやすさを助ける働きがあることを示した。
4. 『海外新聞』に見られる字音語の割合	単	2011年9月	東京女子大学 日本語史研究会	『海外新聞』は発行日時により、初期・中期・後期に分類されるが、それぞれ使用された字音語（漢語）の比率によって、目指していた購買層をやる手がかりになると考えた。調査の結果、『海外新聞』は同時代の新聞としては字音語が少なく、話しことば的要素を多いことがわかった。これは平易な文章、わかりやすい文章を求めた結果自然と話しことばのようになっていったのかもしれないと推論つけた。ここでの発表を基にしたものを『近代語研究』第16集に掲載した。
5. 『呉淞日記』の漢語	単	2010年8月	東京女子大学 日本語史研究会	『呉淞日記』に使用されたすべての漢語を対象に、『和英語林集成初版』の『和英の部』にある見出し語との一致率を調査した。一致する語は483語あり、全体の47%に相当する。次に話しことばにおける漢語の占める割合を算出し、現代語との比較も行った。現代人男性で話しことばの漢語は13.6%という数値が報告されており、『呉淞日記』から13.8%という数値が算出されることを紹介した。「言語変化の分析と理論」に掲載した論文のベースである。
6. 「であります」の放射線	単	2008年5月	兵庫教育大学 国語論究の会	近代になって登場した「～であります」という表現の出自とその性格について先行研究を踏まえて論証を行った。古典落語や「のらくろ」などにも「であります」という表現は使用されており、敬意を表わす表現であるが、当時は講談・講演等でよく用いられた語である。長州方言ではこの表現が今でもよく使用されるということで、方言との関係についても言及した。
7. 『呉淞日記』の表現特性についての一考察	単	2008年12月	白百合女子大学 近代語学会	『呉淞日記』の全文末が文語か口語かを調査し、口語の割合がこの時代の文にしては高くなっていることについて報告した。『浮世風呂』などの戯作の口語や『夢酔独言』の下級武士の使用していた口語との比較も行ない、この時期が一段と現代の口語に近づいていることを示した。
8. 『人間萬事虚誕計』の文体比較	単	2003年5月	大阪女子大学 近代語研究会	『人間萬事虚誕計』は、初編が式亭三馬、二編は瀧亭鯉丈という違った作者からなる。著作の形式は鯉丈が同じように書いているため一見わからないが、やはりどこか文体の違いを感じさせる。そこで、その違いがどこから来るのかを考察し、その一文の長さ、名詞と副詞の使用度、漢語の使用比率などが文体の違いを特色づけていることを明らかにした。多くの質疑応答を活かし、「国文学論考」40に掲載した論文のベースとした。
9. 『和英語林集成第三版』のcol1と注記された語の性格について	単	1997年6月	兵庫教育大学 言語表現学会	方言研究ゼミナールでの発表に改良を加えたものである。発表内容については「言語表現研究」14に掲載したものとほぼ同じである。col1と注記された語と方言である地方語との関わりについて調査をした。具体的には『俚言集覧』所収の語との一致率で判定している。この数値から「東京語」の成立を考えたとき、「下町ことば」や「俗語」「地方語」との融合が重要な位置を占めていることがわかった。
10. ヘボンの漢字意識—『和英語林集成』に見られるあて字の分類を中心に—	単	1996年6月	兵庫教育大学 言語表現学会	『和英語林集成第三版』の見出しに記されたあて字による漢字の用い方についての分類を行い、12種類のパターンに分類した。その結果、見出し語の説明の一部や異相語として意識的なあて字を試みていたと結論付けている。「西播国語」27に掲載した論文のベースとなった発表である。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
11. 『和英語林集成第三版』のcollと注記された語について	単	1996年4月	広島大学 方言研究ゼミナール	藤原与一門下生から成る広島大学教育学部国語教育学研究室に関連する研究者グループの研究会においてへボンのcoll（俗語）と方言の関連について述べた。まずはcollと注記された語をすべて取り上げ、それらが当時俗語としてどのように認識されていたのか、また現代語においては残っているのかということを中心に発表した。
12. 『和英語林集成第三版』における三字漢語の構造 —現代語調査との比較を通して—	単	1995年7月	三省堂文化会館 第七回語彙・辞書研究会	国立国語研究所報告による現代の新聞に見られる三字漢語の構造の比率と明治19年ごろ使用されていた三字漢語の構造の比率にはどのような違いが見られるのかということについて調査したものである。語構成の形式を中心に分類を行なった。なお、ここでの発表を基にしたものを「国文学論考」32に掲載した。
13. ヘボンの日本語文法観—学校文法との比較を通して—	単	1994年6月	兵庫教育大学 言語表現学会	『和英語林集成第三版』にはヘボンによる日本語文法の解説編が掲載されているが、現在我々が学校で学ぶ学校文法とに違いがみられる。そこでまず、その違いについて触れ、ヘボンがどのように日本語をとらえていたかということを中心に論じた。
14. 式亭三馬の片仮名表記と階層意識 —『浮世風呂』を中心に—	単	1993年5月	京都女子大学 国語学会（現 日本語学会）	言語意識に敏感であった式亭三馬は片仮名表記語の使用率と階層とに関連させて記述していることに着目し、片仮名表記の割合や使用語彙が当時の町人の身分的階層との関係について発表した。当時の言語は身分的階層により、位相語としていろいろバリエーションにとんだ語が存在していたことがわかっている。こうした位相語と片仮名表記語との関連について調査した結果を報告した。
15. 『浮世風呂』に見られる接辞について	単	1992年6月	兵庫教育大学 言語表現学会	修士論文の資料について発表した。江戸時代後期における実態として『浮世風呂』に見られる全用例をあげ、男女差・世代差・階層差などの観点から考察した。接辞は口語と密接な関係があると考え、会話文で口語がみられる作品からその働きについてとらえることの重要性について発表した。
<b>3. 総説</b>				
<b>4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績</b>				
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
1. 『現代語再発見』	単	1998年3月	兵庫県立姫路北高等学校	現代語を高校生に興味を持たせるために作成した教材である。国語史を中心に、現代語の抱えるさまざまな課題について演習を取り入れたワークブックとした。主な章立ては以下の通りである。1. 日本語の姿 2. 若者語 3. 暮らしの中の現代語 4. 微妙なことば 5. 方言 6. 擬声語・擬態語 7. 日本語への道（国語史）調査も行ない、教材集として発行した。
2. 「現代語」教材開発私案の実践	単	1998年10月	東京法令出版 『月刊国語教育』	現代語を学習するにあたり、高校生向けの教材として適当なものが見当たらなかったため、ワークブック形式の教材を作り、授業を行ったという実践報告である。このときは擬声語を中心としたワークを紹介した。
3. 和英語林集成 第三版 COL L語彙一覧	単	1997年2月	兵庫県立姫路北高等学校	『和英語林集成』には見出しに「coll」と注記された語が多く存在し、いわゆる「俗語」として扱われている。第三版は明治19年に発行されており、文明開化による造語の活発な時期でもあることから、俗語は口語性を調査するには大変貴重な資料となる。『和英語林集成』は当然ヘボン式ローマ字で書かれており、用例を探すのにも苦労するため、「coll」と注記された語をすべて抜出して翻刻を施し、研究の便を図ることを目的とした。
4. ニュースを利用した聞きまよめの練習	単	1994年11月	兵庫県高等学校教育研究会視聴覚部会 『高校視聴覚部会報』30	国語の観点別評価のうち「聞く力」を向上させるための練習として、テレビなどで放送されたニュースを聞かせた後、要旨をまとめさせるという方法について報告したものである。いわゆる5W1Hが情報伝達には不可欠であり、それを踏まえることの大切さについて具体例を示して説明した。
<b>6. 研究費の取得状況</b>				
学会及び社会における活動等				
年月日	事項			
1. 2017年6月～現在	明石市学校園飼育動物の診療に係る委託事業研修会 講師			